

山田琢纂「山田濟齋君年譜略」の解題と翻印

鈴置拓也

【解題】

山田濟齋（一八六七～一九五二）は名準、字士表、濟齋はその号。慶応三年（一八六七）十一月備中松山藩高梁に生まれる。もと木村氏。地元の小中学校で学ぶ傍ら有終館で漢学を修める。明治十六年（一八八三）五月上京して二松学舎の学僕となり、同時にその課程を修める。翌十七年（一八八四）山田方谷（一八〇五～一八七七）の養嗣子山田耕蔵（一八三九～一八八一）の長女春野と結婚し、山田家を嗣ぐ。同年九月東京大学古典講習科漢書課に入學、島田重礼（一八三八～一八九八）などに学ぶ。明治二十一年（一八八八）七月漢書課卒業後は、二松学舎の幹事などを務め、続いて明治二十七年（一八九四）十二月城北尋常中学校教諭、明治三十二年（一八九九）十月熊本第五高等学校教授、明治三十四年（一九〇二）鹿児島第七高等学校教授を経て、大正十五年（一九二七）六月二松学舎学長に招聘され、昭和二年（一九二七）一月上京、翌三年（一九二八）二月専門学校設立に伴い同校校長となる。昭和十八年（一九四三）一月校長を辞し、五月郷里高梁に帰郷、『山田方谷全集』編集に従事する。『山田方谷全集』三巻は昭和二十六年（一九五二）に山田方谷全集刊行会より刊行された。準

は翌二十七年（一九五二）十一月二十一日逝去、享年八十六。

以上の彼の生涯を大別すれば次の五つの時期に分かれる。

① 高梁出生く中学時代 慶応三年（一八六七）く明治十六年（一八八三） 十七年

② 東京遊学時代 明治十六年（一八八三）く明治三十二年（一八九九） 十七年

③ 熊本第五・鹿児島第七高等学校教授時代 明治三十二年（一八九九）く昭和二年（一九二七） 二十九年

④ 二松学舎学長・専門学校校長時代 昭和二年（一九二七）く昭和十八年（一九四三） 十七年

⑤ 高梁帰郷・『山田方谷全集』編集時代 昭和十八年（一九四三）く昭和二十七年（一九五二） 十年

右の内、②と④は二松学舎と関わりの深い時期であつて、特に②は山田方谷の義孫となつたことが特筆すべき出来事であらう。

山田方谷には嗣子がなく、方谷の弟平人の長子耕蔵をその養嗣子となした。しかし、耕蔵には男児がなく、女兒が二人あるだけであつた。方谷の弟子である三島中洲（一八三二く一九一九）は師の家系が途絶えることを心配し、当時二松学舎で学び、方谷と同郷で学問の筋も宜しい準を後嗣にすることを思い立ち、旧松山藩主で東京に隠居していた板倉勝静（一八三二く一八九九）に提議し、また木村氏とも相談して、準が山田家に入ることが決定した。山田家へ入籍した準は、方谷の事績を顕彰するため、三島中洲編『方谷遺稿』三卷（山田準、一九九〇）の校正をし、その他『方谷先生年譜』（山田準、一九〇五）や『山田方谷全集』全三卷（山田方谷全集刊行会、一九五二）などを編纂刊行している。このような活動が評価されて昭和二十五年（一九五〇）三月には岡山県文化賞を与えられている。

また、二松学舎との関わりで以下に翻刻する「山田濟齋君年譜略」にも記されていないこととしては、彼が帝国大学文

科大学古典講習科漢書課卒業後に務めた二松学舎内での役職であろう。二松学舎では明治十年創設の時より、その門下生の内、特に優秀な者が塾頭や房長、講師などの役職を務めることとなっていた。準もその内の一人であって、二松学舎編『二松学舎六十年史要』（二松学舎、一九三七）によれば、彼は明治二十一年（一八八八）七月副幹事、翌二十二年（一八八九）四月幹事兼助教、明治二十四年（一八九〇）五月には幹事を辞するものの、助教は明治三十二年（一八九九）十月に熊本第五高等学校教授に転任するまで継続し、『莊子』や『続文章軌範』などを教えた。

本稿で紹介するのは、以上のような経歴を持つ山田準の六男山田琢の編纂にかかる「山田済齋君年譜略」（以下「年譜略」）の翻刻である。同資料は四百字詰め原稿用紙七十四枚十補入用紙一枚の計七十五枚からなる。基本的に山田琢の筆によると考えられるが、訂正も施されている。一枚目の冒頭に「山田済齋君年譜略」とあり、次行下部に「山田琢纂」とある。原稿は間々記述が前後し、またページが前後している箇所もあり、翻刻に際しては筆者による整理を加えた。

編纂者である山田琢は、明治四十三年（一九一〇）四月準の六男として鹿児島に生まれた。仙台第二高等学校、東京帝國大学文科大學支那哲文学科を卒業し、金沢大学教授となる。長男琅が医師、次男璋が弁護士となるなど兄達の家学と異なる道を歩んだため、山田家を継ぐこととなった。平成十二年（二〇〇〇）逝去、享年九十一。著作には専門とする『春秋学の研究』（明徳出版社、一九八七）の他、石川梅次郎と共著の『山田方谷・三島中洲』（明徳出版社、一九七七）や、『山田方谷』（明徳出版社、二〇〇二）などがあり、琢もまた家学を伝えることに努めたといえる。

筆者は「年譜略」の複写版が二松学舎大学附属図書館の書庫に所蔵されていたのを偶然発見した。「年譜略」は二松学舎大学図書館のいずれの所蔵目録にも記載されていない。ただ、この資料について考える手掛かりがないわけではない。昭和十八年、準が二松学舎専門學校校長を辞して高梁に帰郷した後詠んだ詩を集めた山田琅編『済齋歸休詩鈔』（一九

六二)には、その最晩年である昭和二十七年の部に「題濟齋年譜略」と題する七言絶句がある(訓読は一部筆者による)。

八十星霜年譜尊 八十星霜年譜は尊し

寸虫又有五分魂 寸虫にも又五分の魂有り

若逢達者嗤不妨 若し達者に逢ふも嗤はるを妨げず

鴻爪丁寧泥裏痕 鴻爪もて丁寧にす泥裏の痕

詩に続く「鴻爪」の注に「はかない足跡を丁寧に書きとどめたという意味に用いる」という一句があるように、謙遜の辞を述べつつも、準が自身の辿ってきた生涯を丁寧に書きとどめたことが分かる。ただ、ここで準のいう年譜略は、琢纂「年譜略」の前段階のものではないかと考えられる。

準自らが著した年譜の稿本は、高梁方谷会より出版されていた『高梁方谷会報』第八号(一九八〇)所収の山田琢「山田濟齋略歴」末に「父は生前に「山田濟齋君年譜略」という稿本を自ら作っていて、いま私の手もとにある」と記されていることから、琢の手元にあったことが分かる。しかし、本稿で紹介する「年譜略」には、「山田琢纂」と記されていることから、おそらくその稿本に基づいて琢が編纂し直したものであると想像がつく。

では、「年譜略」の複写版が何故一松学舎大学附属図書館に所蔵されたのかといえば、これは過去に陽明学研究所発行の『陽明学』第八号(一九九〇)「山田濟齋特集号」が関係していると考えられる。同特集は山田準の学問や当時の受講生の追憶が掲載されており、準について研究する上で非常に重要である。この内、準の孫で琢の長男である山田安之氏の手になる「山田濟齋・略年譜」がある。これは記述の類似性から「年譜略」あるいはそれより遡る準自作の稿本を底本としていると考えられる。さらに、「山田濟齋特集」所収の川久保廣衛『陽明学精義』を讀む』においても、注九に「山田琢

著『山田濟齋君略年譜』未刊。」とあり、「年譜略」を利用した形跡が伺える。ただ、「未刊」というのが、今後出版する予定であったのか、それともただ写本として存しているものを川久保氏が何らかの形で閲覧したにすぎないのかは判断が難しい。しかし、この頃には二松学舎大学において、「年譜略」が利用できる状況にあったと推測される。しかし、依然として「年譜略」原本の所蔵先は不明である。

「年譜略」の文字数はおよそ二七、三〇〇字であるが、それを先に掲げた五期の経歴で分ければ、それぞれおよそ①一、二〇〇②三、三〇〇③八、七〇〇④七、三〇〇⑤六、八〇〇となる。各時期の年数を踏まえると、⑤の記述が最も豊富であることが分かる。この理由は、当然のことながら晩年が年譜作成開始の時期と近いために資料が比較的多く残っていたこと、またこの頃の出来事が準及び琢の記憶に新しいことが大きな理由であろうが、二松学舎専門学校長退任後の準の生活をより詳細に伺うことができるのは有難い。

次に山田準に関する研究について述べよう。まず一次資料として、彼の伝記を考える上で欠かすことのできない資料に、濟齋山田準先生古稀祝賀会編『濟齋先生古稀祝賀記念誌』（濟齋山田準先生古稀祝賀会、一九三七）がある。これは昭和十一年（一九三〇）五月二十三日に行われた古稀祝賀式に関して記録した記念誌であるが、書中には準の故旧友の談や準自身の回顧がある。

年譜については前掲安之氏編集によるものより前に『山田濟齋先生頌徳碑訳文山田濟齋先生略年譜』（二松学舎、一九七七）にも収録されているが、「年譜略」が最も詳細であることには変わりない。

研究については主に二松学舎大学の関係者の手で進められてきたといえる。例えば、前掲『陽明学』の他に横須賀司久『漢詩人列伝』（五月書房、一九九七）で漢詩人としての山田準について論じられているし、町泉寿郎「東敬治書翰（山田準

宛て)にみる陽明学会の活動」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究部『陽明学』第二十号)では、明治から昭和にいたる山田準宛東敬治書簡を取り上げ、同時期の陽明学会を通じた両者の交流を論じている。

また、三島中洲研究会の活動報告書『三島中洲研究』においても度々取り上げられており、例えば町泉寿郎「山田方谷に関する山田準の草稿四種」(二松学舎大学日本漢文教育研究プログラム『三島中洲研究』第五号、二〇一〇)では、準の方谷に對する見方が伺える著作を翻刻、紹介しており、他にも同大学所蔵の山田準書簡が翻刻されている(川邊雄大「塩田良平書簡(山田準宛)」(二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」『三島中洲研究』一号、二〇〇六)など)。山田準に関する研究はこの他にもいくつかあるが、本稿に紹介する「年譜略」は、これまでの研究を補うのみならず、今後の更なる研究をも期待することのできるこの上ない資料であると言える。

山田準の経歴については、「年譜略」の他に『二松学舎友会誌』各号の彙報欄でも伺うことができるが、「年譜略」は実子琢の編纂によることもあって、準の家族についての記述に関しても詳しいところに特徴がある。準の子には六男二女があり、それぞれ男が琅・璋・瑛・璜・琇・琢、女が榮・霜野という。彼らの経歴はこれまで近親者以外はほとんど知らなかったと思われるが、今回の「年譜略」によつて、準の没年までではあるが、経歴を明らかにすることができ、また準と家族や親類との交流の深さを伺うことができるようになった。準は、度々各地に居住する家族のもとを訪れ、何かある毎に漢詩を詠んでおり、家族であるからこそ知り得る出来事や準の心情の吐露など、家族間の親愛の情を伺うことができる。これらの記事も「年譜略」の有用性を高めている。

右のように、「年譜略」は今後山田準に関する研究を進めていく上で非常に有用な資料であるが、問題点もないわけではない。それは現存する最終頁末尾の準没後の記事が「祖先の塋域に遺骨を埋」で終つており次頁が見当たらないことで

ある。細かい点ではあるが、準の死後の記述がこの後どれほどあったのかは定かではない。もしかすると琢によって何かしらの識語が記されていたかもしれない。

準の没後のこととして付け加えておくべきものとしては、『山田濟齋先生追悼集』（一九五三）の存在である。昭和二十八年（一九五三）十一月の一周忌に際し、山田琅などにより『山田濟齋先生追悼集』が編纂され、準と交流のあった各氏の漢詩や和歌、追想文などを収録し、末尾には琅の挨拶文が掲載されている。同書はあまり出回っておらず、準の没後に関する記述や同書編纂の事情も記されているため、琅の挨拶文を左に留めておく（句読点は引用者による）。

昨年十一月家父逝去に際しまして頂戴いたしました追悼の御芳情による詩歌は、故人生前の辱知とともに御芳志に応えたく、終始霊前に供之、一年を過して来ましたが、来る十一月二十一日一周忌に際し、郷里中井村の塋域に埋骨の式を営みますに当り、追善のため諸家の玉什を一本と致し改めて墓前に供之、重ねてその御懇情を新たにしたい存念にて、取りあえず粗装をも敢てかえりみず、却て諸家を穢しますこと恐縮の至に存じます。どうか前後の事情御諒察の上、御宥しを戴きたく、何れ後日を期し、更に追憶の詩文等頂戴できますならば、これをも併せて定本といたしたい存念にて、此の度は粗装のまゝ、御左右に進ぜます御無礼のことどうか御許し下さらんことを御願いたします。

昭和二十八年十一月

山田琅

追記 恩師山田濟齋先生の一週忌を迎えるに当り、諸家御追悼の玉什を編しましたが、すべて不馴れの点、多く玉什を穢しましたこと深くお詫び致します。

津久井泰輔 芳原一男 秋岡留治

これによれば準の没後、彼の友人や門弟より届いた追悼の詩文がその霊前に供えられていた。それを昭和二十八年十一月二十一日の一周忌にあたって書籍とする計画が持ち上がり、まずは「粗製」の『山田濟齋先生追悼集』を編纂したことと

ということが分かる。

筆者はこの後、同書が新たに出版されたということは寡聞にして知らないが、「粗製」と琅が自称する『山田濟齋先生追悼集』に収録される人物には、掲載順に四宮憲章・渡貫勇・國分三亥・那智佐典・鈴木虎雄・加藤虎之亮・荒波坦・前川忠・安岡正篤・高田眞治・今関壽彦・水野昌雄・東繁穂・松林篤・田能村傳太・小池重・田森長次郎・太刀掛重男・日高節・藤井秀・松村見二・吉岡和・原重治・阪巻要藏・平松得一・疋田直太郎・正富彌藏・宮崎喜太郎・高落松男・松隈信嗣・秋本運晃・古屋野橋衛・窪田茂・井上直伍・納所浩・藤田荒次郎・太田彌一郎・赤澤晃・中山英三郎・白神富太郎・牧馬・花土文太郎・児島元三郎・甲田頼光・坂田儀一・居森柳市・鈴木鏗爾・赤崎銀一・金岡英雄・金岡武・菊染金一郎・埴原欽二郎・矢田部貢・大西義雄・森佐市・小倉善三郎・山下修次郎・長井秀三・小西良次・藤井壽一・高本玉太・田中福次郎・小寺天真・下垣保二・阿藤簡・大月邦彦・安立信嗣・津久井泰・芳原一男(以上漢詩)、佐々木信綱・佐野梅吉・原重治・小澤英雄(以上和歌)、瑞圓・田口富之助、田村木國・安原不知稻・芳賀翠月(以上俳句)、安原不知稻(以上俚謡)、木下彪・秋岡留治(以上追想文)がおり、さらに塩谷温・秋岡留治の輓詩が追加されており、内容としては申し分ない出来だといえよう。

このほか平成十三年(二〇〇二)十一月二十四日に高梁市西方の定光寺において山田濟齋五十回忌が営まれ、二松学会関係者も参加している(高梁方谷会『高梁方谷会報』二十四号、二〇〇二表紙参照)。

他にも、準編著の刊行物や雑誌に掲載された論文・漢詩文などは膨大な量にのぼるため、当然「年譜略」には一部しか掲載されていない。しかし、彼には陽明学に関する著作が多数あり、明治から昭和にかけての陽明学研究をする上で彼の存在を見逃すことはできない。これまで準の著作一覧がまとめられたものとしては、やはり「山田濟齋特集号」所収の小

林憲二「山田濟齋著述目録」があるが、これを踏まえ、更に彼の作成した漢詩文をも取り入れ、準の全著作を年譜に取り入れることによってそれぞれの時期における彼の研究の関心が何処にあったのかが明らかとなるであろう。

今回、「山田濟齋著述目録」と「年譜略」とを見比べて気づいた点を一言すれば、前者に記される「濟齋文存 昭和二十三年」は未刊であり、前掲『濟齋歸休詩鈔』に「輯濟齋文存漫賦」と題する七言絶句があることによって従来その存在が伝えられてきた。

しかし、「年譜略」昭和十五年（一九四〇）十二月の項には「濟齋詩鈔」刷印成る。君古稀七十齡を記念し、兒子の請に応じ、詩文稿印刷の企あり。先づ詩稿を整頓して、各体計六百十四首を得、乾坤二巻を印刷す。此月漸く成る。文稿は機を失ひ、荏苒刊行に至らず。」とあり、昭和十一年（一九三六）濟齋古稀の時点で「文稿」の刊行が計画されていたが、結局刊行されなかったことが伺える。『濟齋歸休詩鈔』からは、昭和二十三年（一九四八）年においてなおも自身の作文をまとめる心持ちであったことが分かる。ちなみに二松学舎大学東アジア学術総合研究所には「濟齋雜文」と題する稿本が所蔵されていることを付記しておく。

このように、「年譜略」による記述も踏まえて、彼の著作目録を含む総合的な年譜が作成されることを期待する。

今号には、文字数の関係で「年譜略」の内、大正十五年（昭和元年）に第七高等学校の教員を退職するまでの記事を掲載した。次号には、昭和二年に二松学舎学長として同校に赴任してから没するまでの記事を掲載することとする。

最後に、本学東アジア学術総合研究所では目下山田安之氏寄贈の山田準資料目録を編纂中である。同資料には、準の漢詩文の草稿が多く、これを利用することも準に関する研究では重要であると考えられる。

凡例

- 一、本稿の底本には、二松学舎大学図書館に所蔵される「山田濟齋君年譜略」(複写版) 七十八枚を用いた。
- 一、底本の記述の内、誤記と思われるものについては訂正を施し、原文を注で示した。その他筆者による注は本文へ▽内に記した。
- 一、底本の用字は旧字体、片仮名で記されているが、これを適宜印刷用字体、平仮名に改めた。
- 一、年号の後に() 付で西暦を挿入し、日付は太字で示した。
- 一、会話文、引用文及び書名・篇名は「」で補った。

【翻刻】

山田濟齋君年譜略

山田琢纂

慶応三年(一八六七) 丁卯 一歳

十一月二十三日山田濟齋君、岡山県高梁町当時松山藩甲賀町に生る。幼名鏝三郎、後準に改む。字は土表、濟齋は其号。木村豊君第三子。豊君は旧松山藩学有終館の会頭たり。母氏名は万喜、足守藩長田氏の長女。君一姉二兄あり、長兄名信行、次兄鉄次郎、女兄名は鉄。

明治元年（一八六八）戊辰 二歳

一月伏見の兵変あり。藩主板倉勝静、幕府老中を以て將軍慶喜に従ひ、大阪より江戸に退去す。岡山藩朝旨を奉じ、来て藩城を収め、藩士皆城外に退去す。君、生れて纔に三閱月、母氏困頓を極む。

明治二年（一八六九）己巳 三歳

八月朝廷、松山藩新主勝弼に先封三分の二二万石を賜はる。

九月二十日父君豊、積勞を以て没す、齡五十四。母氏後事を問ふ。君曰ふ「死後のこと我の関する所に非ず、汝善く之に任ぜよ」と。父君資性謹嚴質実、常に曰ふ「吾静坐書を読めば、胸宇常に灑然たり」と。好で経説を研め、辞賦を喜ばず。初め筆札に拙なり。中年発憤、日に一千字を課習すと云ふ。

十月松山を改めて高梁と称す。

明治六年（一八七三）癸酉 七歳

高梁小学校に入学す。母氏督励頗る嚴なり。毎に誡むらく「汝不幸にして父なし。俗に老母育ちは売つても三文の価値なしと云ふ。汝之を勉めよ」と。君、頗る省励する所あり。

明治七年（一八七四）甲戌 八歳

母氏に従ふて讃州金比羅に詣づ。君始て海を涉り異境を踏む。

明治十一年（一八七八） 戊寅 十二歳

長兄信行君指導の下に始て漢詩を作る。小学校主任教師神谷壯吉、亦時に漢詩を課す。姉夫卯木仙太郎、姉鉄嫁すに従ひ、「日本外史」「十八史略」等を誦読す。又漢学塾有終館に論語朝講を聴く。

明治十三年（一八八〇） 庚辰 十四歳

三月高梁小学校を卒業す。成績優等の故を以て「山陽文稿」二巻、頼襄少年時漢文及半紙一束を賞賜せらる。

四月有終館に入学す。是より先き、有志者漢学塾を設立し、旧藩学の名を襲ぎ、有終館と称す。旧藩儒莊田賤夫、号霜溪を迎へて師長とす。

明治十四年（一八八一） 辛巳 十五歳

村立上房中学に入学す。其設備に慊らず、長兄の勧めにより半歳後有終館に復帰す。

明治十五年（一八八二） 壬午 十六歳

有終館に寄宿し、毎朝論語聴講の後、「春秋左氏伝」及「文章軌範」等を輪講す。夜は灯下に「資治通鑑」を誦読す。毎月詩文会あり。嘗て「半窓樹影月痕残」の結句を獲。師曰く「木村氏の子詩才あり」と。

次兄鉄次郎、旧藩士熊田矩光大助に養はれ、東京二松学舎に遊学す。学舎は三島中洲師明治十年創立する所、中洲は

山田方谷翁の門に出で、学職吏職を以て旧藩に鞅掌す。明治後、虎口溪舎小高下を創め子弟を教ゆ。五年政府に徴用せらる。教学の西洋に偏傾するを慨し、方谷翁の旨を受けて、学舎を旧麴町区一番町に設け、儒学に本づいて東洋精神を鼓吹す。君、亦遊学の志切なり。学資の途なし、発憤修励、転機を待つ。「男兒報国志千里」の句あり。

明治十六年（一八八三）癸未 十七歳

四月中洲師より飛信ありて曰く「学僕に欠あり、子の来学を妨げず」と。君踊躍、五月程に上り海路入京、師に謁す。玄関脇の一室に起臥し先任吹野信履、後河野宇三郎、二松学舎の課程を修む。舎は本塾・柳塾・梅塾に分れ、講堂は本塾師邸南隣に在り。舎生凡二百人、通学生百人、幹事之を統率す。師は「孟子」「文章軌範」及「莊子」等を交替朝講し、時ありて「伝習録」を講ず。別に講師あり、「論語」「唐宋八家文」等を輪講す。毎月詩文を課す。川北梅山之を幫助す。六月中洲師、其師方谷翁七回忌法筵を駒込吉祥寺に修む。

明治十七年（一八八四）甲申 十八歳

君、山田家を相続す。山田家は旧藩板倉氏の重臣山田方谷名球、通称安五郎、字琳卿の後なり。明治十年六月二十六日翁没す。養嗣子弟平人の実子耕威君字明遠、号知足齋又瀬北十四年又没す。女子二人あり、男系なし。中洲師、君の学問の筋宜しき故を以て其後嗣に擬し、板倉松叟公勝静公隱居後の名に提議し、君の長兄に謀り、事決す。

三月君帰国し、始て西方村後の中井村、高梁北方五里、山田家祖先定住山田家に入籍す。

四月再入京す。この頃国漢両学の先輩漸く凋落し、後起者継がざるを患へ、東京文科大学は聖旨を奉じて古典講習科国

語課及漢書課を設置し、前年既に前期生を募集し君次兄入学、本年又後期生を募る。君、漢書課を志願して合格し、九月入学す。同学凡そ三十人、中村敬宇・秋月章軒・南摩羽峯・島田篁村・岡松襄谷・内藤耻叟・小中村清矩諸老教授職に就き、經史諸子法制及詩文を分担教授す。

明治十九年（一八八六）丙戌 二十歳

四月二十四日方谷翁の亡弟平人君 医師の配歌子刀自没す。刀自早く寡居し、一子耕蔵をして宗家を嗣がしめ、躬宗家に同居し、勤儉に終始す。

明治二十年（一八八七）丁亥 二十一歳

四月歌子刀自一周忌に際し帰展す。

此月婚儀を挙ぐ。妻春野齡十七。

旧藩主板倉松叟公勝静旧藩地を省す。帰東の時、君随行して入京す。

中洲師山梨県谷村文墨会に赴く。君随行す。

明治二十一年（一八八八）戊子 二十二歳

七月四ヶ年の課程を畢り、古典講習科を卒業す。同卒業、竹添治三郎・大作延寿・島田鈞一・菅沼貞風・長尾楨太郎・黒木安雄・児島猷吉郎等凡そ二十余人。君、卒業論文として「禹域財政概論」を述作す。菅沼貞風の「日本商業史」特に

衆目を牽く。時に漢学振はず。卒業諸人皆就職に苦しむ。君、二松学舎幹事 初め細田謙蔵幹事、君副幹事 及び講師に就職す。

十月君帰国し、家族を纏めて入京し、旧梅塾の一隅に僦居す。

十二月二松学舎本科高等部全課を卒業す。

君、字号を中洲師に請ふ。士表を字とし、済齋を以て号となさしむ。曰く「祖父方谷翁の実学を志せ」と。時に郷の先輩亦君を激励する所あり。君頗る時用を志し、夜、英学塾に英語を学び、又専修学校に就き理財科を修む。而かも材の長ずる所に非ず。又家事牽連し、両者共に結実に至らず。

明治二十二年（一八八九）己丑 二十三歳

六月二十六日君、中洲師指導の下に、方谷翁十三回忌法筵を駒込吉祥寺に開く。南摩羽峯・川田甕江・原田一道元老院議員、幕末翁の門に学ぶ等焼香、席上翁の画像製作及遺稿出版の議あり。

十一月三日長兎琅生る、字士珩。名字は中洲師の選なり。

十二月君、同舎親友池田蘆州四郎次郎・本城鷹峯佐吉、後の問亭と雑誌「東海北斗」を発行し、漢文を鼓吹す。

明治二十三年（一八九〇）庚寅 二十四歳

十月「方谷遺稿」文二卷詩一卷刻成る。

方谷翁画像成る。翁生前写真なし。昨年議に本づき、之を同藩出身画家平木政次に囑す。政次諸家の意見を聴取し、

苦心製作を了す。

明治二十四年（一八九二）辛卯 二十五歳

六月一日次男璋生る、字圭仲。名字は亦た中洲師の選するところ。

池田・本城二子と益友社を創め、「漢文講義録」を發行す。社運勃興し、漢文振興の兆あり。君「箋註十八史略」を著編す。

明治二十五年（一八九三）壬辰 二十六歳

一月君、木村の長兄、国会議員選挙の事に関し、高梁に帰る。

二月二十八日方谷翁後配祖母君、名は緑、岡山に没し、西方に帰葬す、齡七十六。

君、卯木女兒を徳島に訪ふて帰京す。

明治二十六年（一八九三）癸巳 二十七歳

二月六日三男瑛生る。

十月宮内鹿川黙藏・西村越溪豊・池田蘆州・児島星江 献吉郎・吹野聰雲 信履等と文会を創め、行餘文社と命名す。

毎月一集、中洲師及川北梅山時に臨む。君、頗る力を漢文に用ゆ。而かも進境なきを慨し、十数年間の旧稿を焚き自ら励む。文社記を作り左の結文あり。

文者載道之器也。若我同人、行不砥、身不修。文詞雖巧、唱和雖盛、浮文耳、泛交耳。亦何足閱文運之盛衰乎哉。
宮内鹿川之を評して曰ふ「結以躬行実践之言。有斯終尾、真不愧為乃祖之嗣孫矣。」

明治二十七年（一八九四）甲午 二十八歳

七月征清役起る。君慨然、「膺徵瑣録」を起稿す。

八月中洲師、前月越後より佐渡に遊び、腦溢血に罹り、此月越後妙高山下赤倉温泉に療浴す。君、往き侍護し、九月從ふて歸京す。

十一月始て木村氏先塋を品川寿昌寺に展す。木村氏先系近江源氏に出で、後裔伊予今治に移居す。宝曆中、次男信敏君、始て板倉侯に江戸に仕ふ。是れ君の高祖たり。

此月尋常師範學校・尋常中學校・高等女學校漢文科教員免許状の下附を受く。

十二月府立城北中學校（後の府立第四中学）教諭に就任す。古典科先輩深井鑑一郎校長たり。

明治二十八年（一八九五）乙未 二十九歳

三月三日長女榮生る。

八月生母木村太孺人七十歳、長兄及次兄と之を岡山後樂園に迎へ、寿觴を侑む。君寿序の作あり、曰ふ、

嗚呼七十年之間、人事之變、日夜相代乎前。而太孺人終始恒其德、窮而益聖、屯而終亨。今也寿躋古稀、筋力強固、神不衰、視不眊。東西優遊、含飴弄孫、不復知世事。準等兄弟、雖學未熟、官未達、幸皆無大過、各成家育子。百里

相趨、獻觴膝下、是足以寿乎。諸兄曰喜、乃歌曰、俾爾昌而大、俾爾耆而艾。万有千載、眉寿無有害。歌辭魯頌

明治二十九年（一八九六）丙申 三十歳

三月中洲師、東宮侍講の命を拜す。方谷先師を憶ひ「伝君學術獻皇儲」の詩句あり。

四月君、陸軍編修書記に就任し、参謀本部附となり、「本邦古戦史」長篠役、姉川役、中国戦等を編著す。横井忠直主任たり。

十月旧藩主板倉勝弼号泰山東京の邸に没す。君墓誌を撰す。

明治三十年（一八九七）丁酉 三十一歳

一月君、桶狭間古戦迹を探り、年首京都に入る。二日宇治平等院を觀て奈良に赴き、東大寺・春日神社等を拝し、三日法隆寺を経て大阪に入り、始て藤沢南岳を訪ふ。座に近藤元粹在り。八日帰京す。

君、嚮きに二松学舎柳塾邸内新樓池田蘆洲隣住に寓す。既にして邸を飯田町に購ひ移居す。

六月更に牛込区原町に一邸を購ひ移る。

六月二十六日方谷翁忌辰に当る。中洲師を迎へて家祭を挙げ、飲膳を饗す。師、左の詠あり。

新居購得近郊原 緑樹如山丘四軒

此是京城小方谷 忌辰恰好祭幽魂

七月三方原及長篠古戦迹を探討す。

原町の邸地頗る幽邃、樹木繁生す。君、楽是幽居と題し、「十勝記」を作る。中洲師評して曰く「篇篇幽雅高逸、如老余遺世者作、而其人猶壯。宜有所為於前途、未可安于此」と。

十二月二日次女霜野生る。

明治三十一年（一八九八）戊戌 三十二歳

一月二十二日木村母公、伯兄岡山の寓に病む。君、急電に接し、往き問へば、前日既に没せり。二十五日高梁頼久寺に葬る。

二月文会を相州杉田村に開く。観梅の勝地たり。会友石崎小州・児島星江・池田蘆州・本城鷹峯同行、横浜の会友小櫃守衛東道たり。君記文あり。

三月横井編修に従ひ、中国役古戦史迹を探る。

七月児島星江と中洲師を沼津保養館に候し数宿す。

明治三十二年（一八九九）己亥 三十三歳

一月二十六日杉浦天台道士重剛を小石川の邸に訪ふ。酒膳の饗あり、湖魚一尾を添ふ。曰く「琵琶湖産する所、今上天皇頗る嗜好あらせられ、隔日御膳に上る」と。

三月甲信古戦迹を探る。木曾峠を経て濃州に入り、岩村城を観る。

四月始て談経会に赴く。爾後月次一回会集。

六月中洲師七十齡に躋る。皇太子寿詩及銀盃を賜ふ。君、師門諸子と、師の古稀寿筵を上野公園梅川樓に開く。予め銅像を鑄て之を獻じ、又師の年譜を撰す。君寿序の文あり。

七月吉田梅城⁽³⁾庫三、吉田松陰外孫の別宴に紀尾井町皆香園に赴く。森槐南・岩溪⁽⁴⁾裳川は旧知、本田種竹・土居⁽⁵⁾香国・関沢霞庵・永坂⁽⁶⁾石球等新知たり。席上栢梁体を賦す。

十月熊本第五高等学校教授に就任し、単身程に上る。前任長尾雨山、東京高等師範学校に転任し、児島星江主任として君を推薦す。中川元校長たり。夏目金之助漱石曾て二松学舎に学ぶ。英語科主任たり。始て落合豆為誠東郭と相識る。

明治三十三年（一九〇〇）庚子 三十四歳

一月年首休暇を利用し、児島・落合二子と耶馬溪に遊ぶ。筑後川を遡り、守実駅を経て、柿阪・羅漢寺・青洞門諸勝を探討す。又柿崎より路を転じて新耶馬溪と称するものを観る。土人深瀬谷と称す。規模小なるも、奇勝は旧耶馬溪に勝る。森町を経て帰熊す。「馬溪七勝記」及び「斧柯峽深瀬谷の擬称記」を作る。中洲師「七勝記」に評言を加へて曰く、

濟齋星江両君、同寓肥後、同遊馬溪、同作遊記、同見寄示。詳略各異、形容各異、濃淡各異、長短各異。如遊両馬溪、蓋山水不異、觀者異、則所感各異。文章畢竟非写他物、而写我心也。仏氏曰、天地万物、皆我一心之影也。真不吾欺。

因賦一絶曰、

両記形容熟是真

彩毫写出幾嶙峋

始知万物皆心影

各個文如各個人

九州史談会開かる。君、藪孤山の学説を講演す。

七月東京帰省。

八月筑波山に登る。

九月帰任。東宮殿西遊、此地に臨御せらる。

十一月熊田仲兄、高梁中学校より大阪陸軍地方幼年学校に転任す。

明治三十四年（一九〇二）辛丑 三十五歳

鹿兒島に第七高等学校造士館を置かる。君、進んで転任を策し、容れられてこれが教授となる。農学士（札幌）岩崎行親校長・理学士丹下丑之助教頭・文学士菅野養助・小松原隆二・藤村作・法学士寒河保吉及び小崎成章等僚員たり。

六月始て家族を東京より招く。妻春野、三男二女を伴ひ、神戸より海路来覽す。汽船球磨川丸三百六十屯なり。

此地出身陸軍中佐 予備花田仲之助、此歳四月東亜報徳会を創め、国民道徳を鼓唱す。君頗る嚮応するところあり。且つ中佐初め東京二松学舎に学び、君に於て先輩の誼もあり。懇嘱を受けて其業を助け、十一月始て入会す。因みに「東亜」の二字は花田氏、陸軍士官学校時代の学友根津一氏の東亜同文書院、荒尾精氏の東亜と相点応するものなり。

十二月第七高等学校生徒監を兼任す 七年後辞任。

明治三十五年（一九〇三）壬寅 三十六歳

一月熊田仲兄、公務を離れて須磨に転療す。

七月漢文協議会東京に開かる第一高等学校。君為めに上京す。中途病兄を訪ふ。協議会三日間畢り、中洲師を候す。

八月八日三女波江生る。時の寓居眺望裡に錦江湾の遥波あり。因て名付。

明治三十六年（一九〇三）癸卯 三十七歳 〈この年記事欠〉

明治三十七年（一九〇四）甲辰 三十八歳

二月征露の役起る。

春鎌倉円覚寺釈宗演・山城円福寺宗般禪師、前後来錫す。宗般「四部録」を提唱す。君、始て禪説を商量し、十絶の詠あり。其一に曰ふ、

至道元無二 儒禪同一源

放心求得住 即是如来門

中洲師評して曰く「孟軻一言、万古不磨」

七月君、校名を以て第三京都・第四金沢・第六岡山各高等学校寄宿舎設備を視察す。途次備前閑谷学校を訪ふ。校長西薇山毅一、数日前逝去、自刃す。岡本天岳迎へ接して曰く「昨来て善後策を講ず」と。天岳、名は巍、往年方谷翁を迎へて閑谷巒を再興し、谷川達海・島村久と三者、翁の最高弟たり。天岳前年翁と三者との問答を纏めて「師門問辨録」の著あり。

君、津隈宏・小野藤太と毎週僧寺に会して王陽明「伝習録」を会読す。前者、号は秋江、越前の人。少時安井息軒に学ぶ。鹿兒島県立第二中学教諭たり。後者、豊前の人、数学に長ず。同第一中学教師たり。

長女栄、昨春来右膝部に微痛あり。症状漸く進み、七月市立病院に関節炎として医療を受く。

十一月に至り征露の役、頻に戦勝の報あり。偶々第四男生る。君「揚子法言」の「武義横々」の語に取り、璜と命名す。
此月二十三日君、誕辰に当り、小照を写し、短古五首を題す。其一に曰ふ、

功業素期在 半生雄心空

幸有方寸靈 此心古人同

往者不可咎 要積来者功

道固不遠人 学問貴神通。

中洲師評して曰く「虚靈神通、君家々学、然自非事上鍊磨至此、則自誤誤人、亦不少。誠之勉之」と。

明治三十八年（一九〇五）乙巳 三十九歳

君、先代知足齋君の遺志を継ぎ、「方谷翁年譜」の撰輯に志す。七年前始て稿を起し、五度稿を易へ、中洲師の細闕指導を經、旧藩士旧門下に諮り、始て之を公刊す。

七月高等学校入学選抜試験委員を囑せられ上京す。

十一月六日知足齋君二十五回忌辰、英靈を祀り、「方谷翁年譜」を供奠す。

明治三十九年（一九〇六）丙午 四十歳

一月始て方谷翁新年例用の韻に和し「鬢辺有恨数茎白、逢着東風四十春」の詩句あり。

北隅日当山温泉に浴す。行李中「伝習録」及岡本天岳著「自得録」を携ふ。繙閱の際、所見を録し二十条を得、「二得録」と題す。中洲師及天岳評言を加ふ。

明治四十年（一九〇七）丁未 四十一歳

八月皇太子、今秋本県巡遊あらせらる。本県旧藩士風俗革を輯し呈覽せんとす。大久保利貞中将委員長たり。君、花田仲之助・岩崎宰・中馬庚諸子と委員を嘱せらる。

君、本館長の囑を受け、「造士館沿革概略」を輯す。今秋皇太子の台覽に供せんとす。

十月二十六日皇太子来県、次日七高造士館に台臨、月桂樹を校庭に手植せらる。

明治四十一年（一九〇八）戊申 四十二歳

三月長男琅・次男璋共に中学の業を卒る。

君、去歲市内旧清水城下の清水街に一字を購ひ移居す。今夏周濂溪敦頤の「静思篇」五律を聞し「静思婦旧隱、日出半山晴：間方為達士、忙只是勞生。朝市誰頭白、車輪未曉鳴」の句に心契し、其軒を命じて「静思」と曰ひ、次韻して「半砌花開落、兩間人死生。静思物皆好、一鳥隔林鳴」の句あり。

六月市の両郊伊敷村に枳桂庵の墓あり。桂庵、足利氏の末島津先侯の聘に応じ、来て文教を掌り茲に老す。此月県知事阪本鈺之助、四百年祭を修む。君、其事に与かり祭文の奠あり。

八月十日五男琇生る。

九月君、終身の志業に就て省慮年あり。既に不惑孔子曰「四十不惑」の齡を越ゆ。私かに謂ふ「人の此世に立つ。幸に方寸の靈に培ひ、時処位に応じて良知を致し、俯仰愧づるなきの地位に安住するを得ば、是れ人生窮竟意義に非ざるか」と。此より頗る博渉と汎濫とを慎めるものゝ如し。

此月此地の有志者、君に王陽明の学説を講ずべく要請す。君、教ゆるは学ぶの半ばの語に想到して之を諾し、会を王学会と命じ、二十四日始て第一回を四恩会に開く。毎月二次と定め、先づ研究を発表し、次に「伝習録」を講ず。医学士加藤好照^④・弁護士日高尚剛・陸軍副官田中温之・農学博士玉利喜造・医士佐々木直介等凡五十余人参加す。君左の一首を賦して志を言ふ。

門牆難認況升堂 鶯劣何由豸蘊蔵

一卷遺編哲人遠 溯洄徧欲仰餘光

十一月方谷翁正五位の追贈を受く。

此月学徒の修学旅行に従ひ、始て沖繩に遊ぶ。途に大島に少憩す。

十二月前年次男璋、中学校を卒へ、第一高等学校入学準備の爲め、東遊して二松学舎に在り。

此月長男琅、亦第六高等学校入学準備の爲め、二松学舎に赴く。君、古詩を賦して両児を奨励す。

明治四十二年（一九〇九）己酉 四十三歳

一月日当山温泉に浴す。大口に僧平川浩然を訪ふ。

三月紫野大徳寺松雲管長来錫、毒語心経を提唱す。

七月長兄琅、第六高等学校入学。

八月次男璋、第一高等学校入学。

君、歳晚五律に曰ふ、

児遠蓬千里 女癩疾八年

讀書非為穀 舐筆豈言錢

明治四十三年（一九一〇）庚戌 四十四歳

四月廿日六男琢生る。

六月十二日母公早苗刀自没す、齡六十六。葬儀を南洲寺に営む。送葬者三百餘人、谷山に火化す。

上房郡教育会、方谷翁の為に記念園を其郷中井村前称西方墓前に開き、方谷園と曰ふ。六月開園式を行ふ。長兄琅代つて臨む。翁、晩年備中北部刑部村に移居し、子弟を教ゆ。旧門下記念碑を其遺迹に立つ。君、一詩を贈て之を謝す。

高梁の有志、翁の為に記念林を対岸チカウ近似村に開き、山勢を利し、樹を栽え、亭を置き、方谷林と称す。君、亦一詩を贈る。

七月先妣早苗君を先塋に本葬すべく帰郷す。長次男二人、先づ高梁に在り、近沢芳簡と出で迎ふ。近沢氏に投宿し、先づ兩児と刑部に方谷翁遺迹碑を拝し、金剛寺翁の外祖母西谷家菩提寺に先靈を祀り、翁の遺構に係る。祠堂に少憩し、西谷氏に投宿す。更に中井村に還り、定光寺に投宿し、諸人の援助を得て、先妣を先塋に本葬す。中井小学校に講話し、始めて瑞山ミズを訪ひ、転じて高梁に還り、頼久寺に投宿し、方谷会に臨み講話す。郷友、舩を高梁川に泛べて君を勞す。岡山

に入り、児島星江と会す。旧高梁人水野・大塚・団藤等六氏、船を旭川に泛べて君を歓迎す。始て水野正之旧藩重臣井上権兵衛と語る。君、更に近江に入り、藤樹書院を拝して帰西す。

明治四十四年（一九一〇）辛亥 四十五歳

君、方谷翁贈位申告祭を翁の墓前に挙げんと欲し、三月三十日高梁に還る。児琅随ふ。先づ新見町に翁の旧師丸川松隱の墓雲居寺を拝して旧恩を謝し、丸川氏に投ず。四月四日帰村、六日申告祭を挙ぐ。君、祭文を誦奠す。親族知人有志列式者数百人、式後小学講堂に追遠会を開く。翁の門下岡本巍天岳講話す。次日高梁に贈位奉祝講演会を開く。京都帝國大学教授高瀬武次郎惺軒講話あり。数日の後、君帰西す。

七月文部省、国語漢文主任教師を召集す。二十日海路発程、別府温泉に憩浴し、東京木村伯兄の家に投宿す。次日文部省に登省し、新学制教授要目を協定す。井手正鄰伊予人と中洲師の饗飲を受く。又漢文学大会に臨む。八月二十五日中洲師を伊豆伊東の避暑地に訪ひ、名古屋を経て伊勢に入り、始て内外宮を拝し、津市に拙堂の孫旧友斎藤次郎を叩き、樓碧山房に宿す。三十一日帰麿。

明治四十五年（一九一〇）壬子 四十六歳

七月明治天皇大喪、挙国震悼す。

此月大正の改元あり。大正天皇政機を総攬あらせ玉ふ。

九月明治天皇代々木木原に大葬あらせらる。

大正三年（一九一三）癸丑 四十七歳

夏休花田中佐と俱に、熊本及久留米方面に東亜報徳会の会旨を巡演す。君句あり、曰く「三日駆車説会旨、里閭赴善速如神」と。又曰ふ「至誠到处天機見、邑里喧伝中佐来」と。

此歳東京二松学舎理事に選囑せらる。

大正三年（一九一四）甲寅 四十八歳

桜島嶽噴火し、沙煙鹿兒島の空を蓋ふ。市民殆ど避難す。君一家平居常の如し。

君の鹿兒島に於ける、其交友、文に乏しく詩に多し。初め落合東郭の同僚たるあり。次で阪本蘋園^②眞尹として臨む。次で高野竹隱来て詩社を設く。君往来唱酬、詩境漸く進む。

大正四年（一九一五）乙卯 四十九歳

七月二十一日五男琇、伝染病院に没す、齡九歳。

八月東正堂名敬治を王学会に迎ふ。正堂の先人沢瀉名崇^①一岩国藩儒、陽明学を以て名あり。正堂、年来陽明学会を東京に創め、雑誌「陽明学」を発刊し、頗る斯学の宣揚に努む。

中洲師、疾の為め退職す。宮廷内帑金壹万円を二松学舎に賜ふ。

十一月大正天皇即位の大典を挙げさせらる。君、高等学校長に代つて「奉賀即位大典表」を起草す。

宮中大饗第一日の儀行はせらる。県師範学校内に於て饗饌を賜はる。

大正五年（一九一六）丙辰 五十歳

一月中洲師八十七歳、絵原村荘に静養す。子天香桂の孝養を喜び詩あり。次韻奉呈す。「千年老萊子、十里旌倪車」の句あり。

七月第三児瑛、東京農科大学に学ぶ。送行の詠あり。

此月方谷翁四十年忌、高梁郷人祭典を頼久に挙ぐ。児瑛をして代て拝せしむ。君、詩を奠して「慚我萍踪負郷老、歸休願及十年中」の句あり。

十二月歳晚書懷五律の作あり。其前半に曰ふ、

斯生経半百 耳食俛增慙

灯下瘦肩兀 案頭小著三

君、此年「新納時升薩士伝」「言志録私抄」「西郷南洲翁遺訓及遺文」の三小著あり。第四句此を謂ふ。

大正六年（一九一七）丁巳 五十一歳

二月紀元節勲五等に叙し、瑞宝章を下賜せらる。

四月薩摩義士木曾川修治工事祭典を武徳殿に挙行す。岩田徳義（義）東京より来会講話す。君頗る其事に与かる。

五月日向都留教育会に赴き、薩摩義士を講話す。

六月三日東京二松義会、中洲師米寿賀宴を三云堂に挙行す。君、予め二児璋に命じ参席せしむ。

七月君、家事牽連し、東京に上らざること七年、中洲師の老況漸く加はるを聞き、且つ其の米寿を祝すべく、二十六日上京の程に就く。二十九日木村長兄の寓に投ず。次男璋在り、曰く「上海日清汽船会社就職の約成る」と。君悦ぶ甚し。

次日中洲師を絵原村荘に候し、米寿を祝す。師欣然、談緒多端、午下退去。次日乃木邸を觀る。郷友芝浦生洲、樓に君を歓迎す。

八月十九日木村先考四十九年忌及母君法要を品川寿昌寺に修む。午後児璋と再び中洲邸を候す。師、璋を誡めて曰く「凡そ事一身の私に出づれば、驚天動地の功業も一己の私を成すに過ぎず。誠の一字を以て万行を貫く、是れ方谷師余に教ふる所、子之を銘記せよ」と。璋退去す。君、師の晩膳に侍し師家に宿す。翌朝師、童車に乗り近勝を探る、君侍護す。既に還て別を告ぐ。師、天皇賜ふ所の蠟花瓶を餞し、且つ曰く「足下多子皆成人、喜ぶべし。内子春野子、健勤善く多子を育す、亦感謝の辞なし」と。此に到り、師失声放泣す。余五臟裂けんと欲し、急に次室に下り、更に又別を告ぐ。師又曰く「璋児材幹あり、一事業を成すべし。余其の果銳を恐る」と。又曰く「来年若し入京せば直ちに余家に投宿せよ」と。二十二日東京を退去す。前約あり、山口県柳井津駅に下車し、県民の爲め報徳講話を試む。九月三日歸麩す。

長児琅、九州医科大学を卒業す。

九月第三児瑛、東京農科大学に学ぶ。

十一月「西郷南洲翁遺訓及遺文」を五刊す。爾後十数版を重す。

大正七年（一九一八）戊午 五十二歳

一月二日福岡に赴く。次日始て長崎に遊ぶ。六日福岡に遷る。八日児琅、加藤芳子を娶る。加藤尚義医学士岡山出身の妹たり。次日帰覽す。

三月始て宮崎に遊ぶ。其事長女に関す。

五月琅夫妻帰省。

七月高等学校選抜試験調査委員を命ぜられ、十七日上京。先づ中洲師を候す。児瑛随ふ。角彌太郎を常陸日立鉾山に訪ふ。池田蘆洲・福沢廻瀾偕にす。

八月七日中洲師を訪ふて別を告ぐ。晚餐に待す。既に辞し去らんとす。師落涙語なし。次日書を賜ふて曰く「昨日の別、感極つて語る能はず。他なし、子能く祖業を紹ぎ家声を墜さず。今先師に代つて之を謝す」と。又五律二首を賜ふ。一は君の呈詩に和し、一は即ち謝詩なり。既に数日、二松学舎諸子、君及び尾立維孝・小堀銈作を大森松浅樓に迎へ、飲を叙す。中洲師亦臨む。

既に東京を辞し、岡山に投宿す。東正堂、岩国沢瀉会より来り会す。岡本天岳・谷川達海諸先輩、二人を浄教院に招響す。此日謂はゆる米騒動の日に当り、帰途喧噪の声を聞く。君、更に正堂を伴ひ高梁に帰展し、奥万田の郷に旧御茶屋址を訪ふ。七十年前、正堂の先考沢瀉、方谷翁を訪ひ、茲に宿す。又正堂を導ひて中井村に方谷翁の墓を展す。里人正堂の講話を墓下に聴く。更に岡山を経て味野村児島郡に野崎武吉郎を訪ひ、其の迨暇堂に一宿す。翌日正堂と岡山に別る。

大正八年（一九一九）己未 五十三歳

一月正五位に叙せらる。

中洲師、九十齡に躋り「忠孝多年講一經、滿門桃李映春庭。新鶯囀在窓梅外、領得東風九十齡」の詠あり。君之に奉和す。師又碑銘を自撰す。

五月十二日中洲師、東京番町自邸に没す。十日電報、其重患を報ず、君愕然。十二日朝発程。十三日神戸を過ぐ。始て前日師已に没せるを知る。夜入京、師邸に着し、柩前に哭訣す。十五日青山斎場に神葬の靈を送り、洗足池畔小池埜域に埋葬の式に列す。十七日京を辞す。旧友野島彌太郎に要せられ、広島に一宿す。十九日福岡を過ぐ。長兒琅、突如來り語る、「朝鮮草梁鉄道病院に就職せん」と。君之を賛す。夜帰麿す。

六月報徳会主宰花田仲之助、本拠を桃山に移し、四方に発展する所あらんとす。鹿兒島の後任に就き、頗る人選に艱む。此月次男璋、上海日清汽船会社より帰省す。

八月三兒瑛、君の旧友野島彌太郎の養嗣子に懇請せられ、其一女に配す。君、其郷備後東城に赴き、婚儀に列す。帰途長兒琅の朝鮮釜山草梁洞医院に就職せるを訪ひ、相携へて北上し、箕子廟を平壤に拝す。

十一月君、王学芸会及諸有志と中洲追悼祭を教王院に挙行す。会する者六十餘人。君祭文を奠す。宮内鹿川評して曰く「此種之作、非尋常師弟間所夢想得也」と。

大正九年（一九二〇）庚申 五十四歳

三月皇太子巡遊、鶴駕を本県に駐めさせらる。君、予め県庁及市役所の為め奉迎文を稿す。二十六日皇太子海路上陸、県庁及本校に臨ませらる。

四月皇陵を桃山に拝し、乃木神社に謁し、報徳会二十年紀念大会に京都岡崎公会堂に列し、恩賜金拝戴式を行ふ。

五月吉田賢龍館長を送り、渡辺董之介新館長を迎ふ。

十月教育勅語渙発三十年記念式を挙ぐ。

十二月方谷翁長瀬宅址の碑成る。旧門人谷資敬等主として其事に当る。君内子及児璋をして其建碑式に列せしめ、謝詩を賦し贈る。

王学会諸子と城山浩然亭に会し、歳晩を餞す。君「十有三年夢中過、百餘之友四方来」の句あり。

大正十年（一九二一）辛酉 五十五歳

昨歳次子璋・三子瑛、各一子を誕す。君、新年口号に「十指児孫昨添二、辛盤先祝一家春」の句あり。

七月勅任官を以て待遇せらる。君、感激して「疎性免三黜、明時取寸長」の詩句あり。

八月鹿兒島新聞社、可愛嶽探討の挙あり。君、其列に加はる。嶽は日向東臼杵郡に在り。其麓を長井村と云ふ。明治十年の役、薩兵其首帥西郷隆盛を擁し、嶽頂を突破し転戦五十里、還て鹿兒島に抛る。

木村伯兄の六十一齡を寿し、五律の詠あり。

大正十一年（一九二二）壬戌 五十六歳

君、首唱して孔夫子二千四百年記念祭典を造士館講堂に挙式す。又記念書画展覧会を催す。東京斯文会、孔夫子二千四百年祭典を挙行す。君往き拜す。

六月君、佐藤孤松・志方蘇雲と麿城三十勝を選び賦す。又「鹿兒島八景」の詠あり。

七月詩界の長老国分青厓高胤東京より来遊す。君、同志と之を鴨池旗亭に邀へ飲を叙す。

十二月選ばれて遙に二松学舎名誉教授となる。

長男琅、先きに朝鮮より還て岡山に医院を開く。君、之を訪ふべく三十一日岡山に入る。

大正十二年（一九二三）癸亥 五十七歳

新正を長兄の医院に祝す。

此月詩を賦して、東京五老人に寄謝す。宮内鹿川七十八・谷東江資敬、七十五・波多野鶴山重太郎、七十二・富谷泰州、七十・室希堂又四郎、七十四の五老、皆方谷翁門下たり。相集ふて先師を祭る。

五月高等官二等に陞叙せらる。君、晚晴を以て其居に名づく。

卯木女兄の古稀を寿し、七絶一首、五古一章の詠あり。女兄、同藩卯木仙太郎に嫁し、晩年東京に寡居す。

大正十三年（一九二四）甲子 五十八歳

四月十一日肥前多久村孔子祭典に往き陪す。此地佐賀の支藩たり。孔廟を建つる尤早し。邑人大塚己二等相伝へて釈菜を行ふ。祭後草場佩川の旧居を訪ひ、熊本を経て還る。

七月従四位に叙せらる。

大正十四年（一九二五）乙卯 五十九歳

一月卯木女兄東京より至る。之を朝鮮京城の一兒鞠太郎の寓に送る。

七月加治木町王学会の請に応じ、「伝習録」を安国寺に講す。寺は僧南浦の旧住に係る。

東京東正堂、每夏其郷岩国に、其先人沢瀉の記念講会を開く。君、招かれて往き列す。

八月報徳会の伏見桃山会堂成る。君、其講会に赴き、王陽明の教法を講演し、西郷南洲に及ぶ。畢て芳野に遊び、延元陵を拝し、又長州に吉田松陰の松下村塾址を訪ふて還る。

大正十五年（一九二〇）丙寅 六十歳

三月官庁行政整理の事あり。君、願ふて第七高等学校教授の本官を辞す。

四月第七高等学校講師を嘱託せらる。

此月報徳会、創立二十五周年記念式を伏見桃山会堂に挙行す。君、其式に列すべく、内子と程に上る。式後君夫妻、伊勢神宮を拝し、汽車東京に向ふ。沿道桜花盛に開く。君の内子、鹿兒島に移居以来二十六年、始て此遊あり。君其勞を憶ひ左の詠あり。

薪水芳心四十秋 今遊聊此欲相酬

鶯花百里海東路 卿解顔時我解顔

東京に入る。次子璋、妻兒と来り迎ふ。其の申々荘に寓す。連日遊覽、且つ故友を訪ふ。

正四位に陞叙せらる。

七月高梁に帰展す。方谷翁五十年忌に當る。十八日方谷会員の援助を得て、翁五十年祭典を高梁公会堂に挙行す。次で

二十五日墳墓の地中井村、二十九日開塾終焉の地刑部町に挙行す。三男瑛及び姪熊田国夫随ふ。

此月高梁の諸有志、方谷会を組織し発会式を挙ぐ。君之に臨席す。桂泰治郎・寺尾哲之・荘直温・板倉敬信・森沢磊五郎等五十四人、初会の会員たり。

八月君、文部省より外務省対支文化事業支那視察員に選ばれ、支那各地を巡遊す。鈴木虎雄 京都大学・中山久四郎 東京高等師範学校・湯浅廉孫 第三高等学校・平沢東貫 山形高等学校 同行す。十三日長崎発、上海より蘇杭を視、南京を経て江路武昌黄鹤樓に登り、漢口に宿し、京漢鉄道に依り北京に入る。泰山に登り、孔子廟及聖墓を東魯に拝し、青島を経て、朝鮮京城に卯木女兒を訪ひ、九月十六日帰薩す。

十二月第七高等学校造士館講師の囑託を解かる。君、明治三十四年三十五歳、始めて任に此地に就き、在職二十六年に涉る。十一日県市庁・銀行・報徳会諸子二百餘人、君を鶴鳴館に招請して別を惜む。由此七高長及岩崎前校長等送辞あり。君、感激之餘、左の詠を発表す。

卅年俯仰此山河 可耐今朝唱別歌

波色嵐光斜日外 并州回首故人多

君、王学会講席を主宰すること実に十九年、会員送別の宴を張る。君「姚学研修十九年、堪欽諸子護持堅」の詩句あり。君、十餘年来研究及講述せる王陽明学説十数篇を整頓纂輯して「陽明学精義」と題し、印刷に附して会員及同好に頒つ。鹿児島市聯合報徳会、君に感謝状を贈り「明治三十四年以来、二十有六年一日の如く、本会の為めに尽瘁せられ、感銘に堪へず」の辞あり。

〈以下次号〉

- (一) 底本「梅坡」に作る。
- (二) 底本「岩谷」に作る。
- (三) 底本「土井」に作る。
- (四) 底本「永阪」に作る。
- (五) 底本「好尚」に作る。
- (六) 底本「坂本」に作る。
- (七) 底本「栄」に作る。
- (八) 底本「義徳」に作る。